関東無氣物語考候寄

之

へ伊13
2679
3

門へ例3
2-679
巻 3

櫻山文庫

鐘馗様の事

はるゝ馬場の神田川の生れ十八九之比
之谷船乃二丁五三丁と漕ぎ乃ち紀船くかも
つゝく大きゝ者ふくゝ人もきいとう ある時おひるハ
夜月ハ海干乃水のこゝとくうかくとかるゝきふく
世ゝ成おろんも口をしいさや死を寸一として花く
しき男伊達と成くよ紀喧嘩をして死て名も
岸一人ものとん身丈のうつり男たてとおひ身て
いまゝ人とゝ成くゝ而ゝ中橋筋の者葬礼ゝ糸人
海ゝ乃身乃廣小路小ゝ紙碑の上口論仕おし
加合んくすゝ成ゝ而ゝ筋ゝの入ゝ橋の末橋小ゝ
を人成ゝ伏ゝ筋の者人橋ゝ而ゝ股を切ゝ

又右の門へ近付候ハ又右の門ゟ組伏せ
捕てくかつる足を弾きくハ
たての名も高き御蔵おく甚太七郎家
きくいまれ男兵者あり此七郎家ハ
男たてハ敵くハつれて敵の
軍勢やくゝ鏡と分しくし此甚太七郎家の
くゝ此ヶ所家切蔵に生らいの鉄棒いろく
有し拾貫匁の門福富町の名主成果ゟ今の
所屋敷命ハ七郎家四代目の子孫く甚太の
ゟ家ゟ昭をさてつ
格の中ゟ通の武家鞘の書しゟ論と
ゟ方校合すくふあやまき所ゟ所たの志中へ

かけ入意外ゟ拙者寸志中へ市兵衛と大刀ぬきふ
なり刃方市ゟ答あ通屋くへ今ふハ工門あち
ゟくゟ寸も鞘のあゟ大刀也へ切ゟ
られぬゟ代拙者も通ゟ屋敷有へ意外ゟ
からの小者と屋くの出ゟ少く大者と及へ者ハ
後と南くへ人口拙意を後へ口論ゟ市屋くゟ乃
大者をあ所中へ所ゟ切ゟ立流ゟ男をころ
南くハ入くゟ大きゟハ殺しく有ゟ横筋ゟ
有ゟ此ゟ南無阿弥陀佛の六字と大きふ
彫付しを此ぬき鞘絵ゟの下乃市志あ花かゟの
二尺四寸乃大脇ゟ横へ刃方有屋ゟ引ゟ
供の者ゟくゟ我の中ゟ立ゟ制止させし有横

花くしく枝花一ツ　さて伊左衛門吉原二十日ゆ
玉屋乃綿（二三キ）まとうゆ女郎と別深て通ふ又
小多義組といふ男たて有り中ゆも小多義格子前
ちゆしき音くし見せも玉屋と明しあり　あるゆ紀
中の所乃茶屋ゆ　玉屋をきて伊左衛門もまる
いまゆちりくゆ格子前ゆ出合ゆ通ふゆ
小多義左衛門ハ紀の時　ややゆ清をたきて
ゆ紀ゆ　すやとゆ伊左衛門寄ゆ夏の時ゆ出の
かゆ　二人や立人ゆ清　新二ハ　おもひもよゆ
ゆれゆあるゆ小多義組ゆ　小多義左衛門ゆ
岸ゆとゆ格子前ゆ　清伊左衛門ゆ出ゆ
我ゆさたる　眠さハ　哭の無則を　清切ゆ

伊左衛門ゆ胴中をかゆんとひゆとしぬきゆ
かゆる伊左衛門ゆ小世界めゆゆ枝合かゆる小多義左衛門
日ゆ左衛門ゆ二人切ゆ　伊左衛門ハ　ゆ人ゆれ玉屋の
格ゆを小指ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
伊左衛門ゆ　この如命ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
出ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆハ格子前ゆ　小多義格子ゆ　小袖我
投ゆ　ゆ　大門の若い者ゆ　ゆ　ゆ
乃ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　錦ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
上ゆ乃文句ゆハ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
若い者ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

伝九郎そのこハいふまゝ小多喜絶をも念比なれども
世間かしと秘つれて切諸ふ家をわらひて所円
狭抱こそう打あるく双方へ川ふよ二丁目の名るる
からて双方ゟ小忍ん人ありれハさてゝ皆く運強
双方けら時く所円も大六成ま放ら亦人も扱ひ申ん
仕合ふくまさし事の起りもいさしの言葉ふとかめ候ふ
たゝいゝまひけとや事も否もく申す一向ともの目とけ
られ人女郎めいとくいへし人此上ハ名を所円亭を被
なさしと乃女郎ゟ此喧嘩下され〜〜候と申しい
こう扱ひ無事ふきて所人まて名を再方へ申上ハ此たび
しき喧嘩無事ゟ致しとたのみ人祝儀ゟ今りハ玉屋
かの客衆存じ連人ても上々海いつきと人も此度踊り中

他人ゟて双方の人く扱たり亭を喧嘩いをひて
仕中さく人今日ハ世ふて亦起ひ下されへやうくて
ま取ていよ無理ほり此哉ハ家此方より無仕舞す
いつすへしくてりふ女郎あしめ皆々亭を取の通り
ぬしかされへくとなくて申志うるハ右扱り致へ
每今日の事無事起ひそて家々時々終ら行
女郎衆ふ所無仕舞ふ双方いつすへくん方乃
客衆へて毎日ハ踊中女郎ともちんの海くま起ひ
給へくと右の印ふへ喧嘩無済ニ日ニ秋の大起ひ
和田乃十蔵九十三騎乃酒盛もかくやと祝乃
酒宴時しけり

大小の神祇組の事

延寶天和乃比まで極ひすきの喧嘩すき小く
公方乃庭指大小の神祇組と名乗て江戸中乃
町々を徘徊中喧嘩賣り者多下谷の御徒の屋
敷火の番乃所也とは四月も不の軍へ〳〵あり間し
矢頃家の山岳源八志賀紀伊之介祖父赤羽伊豆守
を塩吉之介稲荷源次白籠之助飯沼左門左衛門
（但の頃の頃迄の）日十左衛門徒黨と相あらひ出て喧嘩口論ハ
ゞ小〻書はくに〳〵ある時観音小く所奴子の
誰れとも乃喧嘩をし此事の吐り付
神田筋中迄の男たて仲乃神祇組やもすれハ
大勢の連れたのゝ者一御家人とゝ事小く間
（此ハ神祇）
ゝ乃事ハ左ゝく吟味ゝ我間く仕事と
すゝこ我れ此事の如し誰小くも一時貴ゝ記ケせん此
人をかくる場所の和泉左文の芝居乃あ矢頃家の
松井新文系同名す宮ゝ傳馬所乃鐘馗半系紀裏
安系てこの十系左衛門六系系名喧嘩成神祇組
毎人いさ仕中〳〵と左衛の芝居の前ゝ切徒
半系ゝ家加と十系安系松井新壹系と鐘馗左衛
門系ハ世界ゝくちゝ大ゝ貴ゝ左ハ結き抜と抜き
鞘よりめく先れを神ゝ抜ゝれゝや入れ
切合ゝ小ハれハ仏系ゝ〳〵ゝ仕ゝ
安系指を家ゝれ引退くすゝ家加ハ抜
ゝ方ゝ家と貴すゝ切て鐘馗半系すゝ

者をれハ姉を込く切る右仲ハ少成年あやうく
乃ち而り杭井新九郎ハ鐘馗を大袈裟に
切込より半兵ハかく迄あくの味方乃者をつく
る負すまきを初て左おのひもよりて切り
ろく地ゝゞ少をすいろうを会し杭井ハ鐘馗を
切て左面かけぬる近了りり矢阪右仲を追ん
せしゝ迄ハ切ハ共ハくと者を打人大塩棒
姉を面少て有まく右仲も切ちゝ分つくろふ
ゝ左ゝ金永閑芝居乃ハ左ゝ者も右を半兵
ヤセし有大ちゝ少てゝ心もあく面く不敵の男成ち
世而人来り清馗ハ味方をハ人しハ子神祇組めを
杭めく少を捧すくめゝ世んハ口惜ことさく泣ちう

切ゝ近る事かさく小ふゝと光ゝ見右仲をつゝ
眼さ引ぬゝ始より前へゝ迄一右仲ハ杭井我
ほんゝ和泉左文ハ芝居乃前まく引ちゝ来く
鐘馗ハこの右仲ハ半兵衛のたゝる我矢阪兵ハ
半兵ハ仕留ちゝ言ゝ小ヤセハ大塩をちゝ半兵
くゝ引ゝ清馗半兵を矢阪右仲をお果しち
仲ハ人ゝ人ゝ毎人切ゝ内拾ち右仲迄の付鐘馗を
切る時ゝ鐘馗ハ兵ゝ右仲を突通して死る
ゝて大工半兵を退る脇ゝ右脇ハ所内一同ゝ
ヤ合毎人相ゝ回ゝ切死仕ゝヤ右見使来て
ゝ右ゝ死人ゝ相違ハ右の証ハ来ゝ
ヤ人是ハゝ鐘馗ハ姉ハ貝だて仲百

此ともわりりて附出来置其カゝ云ふ事前
大小の神祇をおふしさふらひゝ
鐙鐙ゝ御ふいって後をして
紅(アカ)ふうふんおもしろく喧嘩して
尻を西へ向けて立たる古き儒

神祇組捕らるゝ事

神祇組下谷の廣徳寺前にてハ志賀仁右衛門山岸源八
友ともろとて掛合ひて強もの稜角ゝかけ立て刃ん揃
する家老とんよりて乃藝家ゝにてし若人達の
内にも刃傷向ふ人ゝ叶ハぬ者あれとも中川めハ我
切へしいやゝれとか家来ゝ任せたふてい不意く斬殺して
きりたつり退て切遠ひ切ゝなく あき来 者乃
ことしめるゝ組祭ゝ御蔵前の強力者だゝ為云おさる
右人ゝ神祇組の客ゝ及ひ刃揃すれ時ゝいつれの武家
方ゝ儒子の袴召して四五人連立て祭りんゝいおよふて
神祇組の掛合の前をて高笑しゝ切 志賀仁右衛門いさ
まや川たる一太刀ゝ居合せへし岩原八大夫の酒乃者
たと思しと掛合とかゝて儒子の袴を召たる武士乃
肩先を袈打ふしてひつゝとて退く連の侍も刃を見
これくといふ日たやわらの前ゝ居て源八前といふ
かゝといふ源八笑ろて刃をる前をといふまゝやく受けて切
通りけゝ右の手ゝ負へし侍の連を切つって側前寺乃
垣を飛越其門ハ加まゝて走りより殺通しふ くゝぬけて

やうて我れ〳〵先きに立ちて
物ものうあるあと山岳源八吉原乃介所ゆく人我れ
あやめんわぬしが御の御俄有しゝ回ん流云めしの全俄
出来て見ん和の者我れ今出し大門ゆく腰のとゝ
吟味ゝ成其比八度て有しゝ時改出り源八い
人を切ると出ゝ血我おし ぬくひ大門口へ向出ます毎ゝ
我れハ下谷御徒組の山岳源八と申者ゆく出来ハ
根籍者の御改のゝ 私ハ元国生出来ます宿えく
死後ゝ中ハ力を御徒下されてくゝそて力と我れ我れ
持御吟味下されへくゝとゝ役人いゝゝ小や相違ゝ
とゝく通りるされて此元国の回ん流吟味してたちち
切ちゝしいゝと成て源八捕てゝ小人かゝ

成事いよゝ定り諸人の噂後ゝ及しゝハ是ゝゝ下谷
御徒組ゝ改ゝ申事ゆく石塚大小の神祇ゝ
公方の庭ゝとゝ石祭ゝ小ゝ出大変恐流ゆく
時ゝ所ゝとゝ恐変相ゝ天和年中 ゝ比の盗賊奉行
中山出解出反〳〵此ゝゝゝ石捕〳〵ゝ行ゝ馬石塚
ゝ日ゝ迫ゝ出る其日八神祇組一谷の八幡ゝ
能芝居有ゝ皆ゝ物しゝ居る我事解出反ゝ自分
奉ゝ迄大事の出法成ゝ成ゝ 許人あり奉ゝ所人
来ゝ中ゝ宮ゝゝる〳〵大切成京ゝの事成中人樂ゝ
奉ゝます大小を渡ゝく役所人ゝ今奉ゝ人ゝ申宮ゝ
神祇組出ゝゝ有ゝ男ゝ全のゝく京ゝゝ成屋ゝや
いゝゝまゝ長ゝ屋ゝゝやゝゝ捕ゝ縄を

かなる悪心の急をいそぎせんかたなく血気の者かくあるまじ
勘解由殿にハ川出中さすにハこぬまハ定との御事なれ
ことさらこの向後も公方の尻押をハ任をやめかけ彼にても
いふ恋質に成申なるハ今いそぎせんよかし今の一存にて
御しきの捕人ともまた度々打果せしや申せし小残りの者共
其内近人召して高吉にも請合て申おこしつる切り出右の
宗門と言ましんがかくて国の上乃恥辱なりと申小付と
かく乃仕合是非もなし但し公方此尻持の事是ハ然も
乱世乃ならひて公方様御馬出る事あるとも御目見の先かけ
我らとおもふそいふさきに勘解由めよしてきる程き綱の
中なるやといふ牢合と成候て向後勘解由殿に今めハ
くれとやまれける残りの神祇組共と相近く候て静

放れる事何も松井新五郎入道してに取しけしかも下ハ谷
妻恵の坂ふに勘解由殿をまんと明友の敵やしぬゆへ
切りくる西風乃浪よする魚も西ろ子不と捕まへと切れ候り
不運のかたち彼ニニそなれ

扨の五左衛門新儀にある事

上列家居並了一本木乃五郎一と申気象之者
あり有徳なる出らなる五橋乃かり流石石川乃
寺ある事なる下よ大手城廓乃高辛へりれハおしても
月秋の頃ハ五橋より眺てみれハ螺ふたつるこもるを
ま此伏居す事る所へ山伏通りかけ五郎一山伏を呼て
此地をみるといふ山伏謹み取残五郎一に石残追る投付る

蟻ゆくと云を山伏先へ近づくのうハさを
出羽守かる花遠公指の下に大き成石乃平成の通を
ちらす花ざり和泉守殿定とゆき傳者の蟻を
軍と言へかる我出羽一長向成ちらす小切ゆく
ち切抜ちく凡間をのゆく切割きうつる紀ぬり
唱度りさもくと成の内一入りちちらるく奥き
米かちの一寸ちく凡るる作き成の中に二人出の
うハちく死ちく有しちく出羽一ハこちもせ七条吉ちく
戸谷成百姓西人条是ちる成吉ちちく
凡ちく分戸合ちる宮ちく白戸塘町中村郡宮出
雖乃出ちとりる大気象者 喧嘩好のいちく者成
京故小ちく大喧嘩をしく人も多切ちく有も大き成ち成

数ヶ所負退ちし者ちく此喧嘩京都小ちく掛小器の
親に出ちをかこひちく白戸人近一ハ戸作ちる
喜沈ちく出ちる喧嘩の節ちく白戸を近ちちく
上列多人出ひちく新を原一ハ成ちく成
たのちる西いちる時ちく近ちく上列の市乃日小ち
変人賞ちらいちく有不敵乃出ちる小ちく市乃
辻相賞を打ちくひちく人家吉ちる方の出ちる出ん小
ちくちら一ハ理喧嘩を云ちく白力西ちたきちちす
ちく中ちる有ちる人大力ちる掛ちる出ちる方をつんく
山ちる下一投ちる殘を家ちく長ちく吉ちる方ちる
の北出羽守と指ちる近ちし出ちたのちしく
中いつちちも赤ちちちる出ちる伯ちる出ちちも

かゝりけしが右仕合ゆへ行かゝりし道に辻ぐらの前にて
年に敵味方の戦を借りて来りし見よと
出産しけるはおのれよく見覚えて指差す五人の者皆入ぬ
事と笑って聖ふん袴の物を中すんでいふ日言ければ
湯に入り親良といふ者よりの合手を答へひろく所に喪日
より追々入者あり則ち仕合いたして家内の者四人そ
の者共を殺して其身も自ら縊りきの盗賊どもを
打ちらし故切んと参りて此盗人ことの外大力にて我を
つかんで去よりむか下へ投捨て無念や出てんとすれどもけの
事なれば命に十町ばかり突倒して深手に大なる疵さしひ痛く
盗人見て去る人々も其覚へは口惜しき事ながら八幡山の
ひけるせうくはやめにはやめけれども小船にしめして

無念ながら跡にくぐりてとりて刀を抜きぬき出へあがる五人の
見れば喧嘩して投捨てし者とも何に是はいかにと
おのれ内々なんの者共を見て下り見て五人の者へ入
切らんとするを踏込つかんで投て五郎兵衛の手もとに
いふて切つて五人の者うかがいしを表をさして打かけ出る久米
吉も我をつかんでかゝりし者を五郎が疵負ふて突当たりし
いつそ殺せといふて切る五人の者は利き肩へ突かかりき
曲者(ハリツケ)の中へ逃入見て打ち懸ってのらりくらりと五人の者へは
路地の奥へ隠れしと中者の前まで逃の追ひかけの通りと語り
これは不届きなりとも打ちて帰る者追手も来ても届かぬ
よく見んとあきれて事を見て了て彼の上列追ひとどまる傍に
いさしたる仏への軍例の法と存ずればそれいはいふなく候

息子ハ居ても五右衛門不案内なりしにて土産も無きよふにて
五右衛門ぬれにて悪化国へ来て乃御すられし捻挑し
又其吉右衛門が家来となりてされたく指引の事を五郎三郎
男残る人をする者が江戸なるを同くなりて来りし者を右乃
仕りひとつくりて五右衛門が家をめぐらして後にて右の所へ
おさめ姓乃五右衛門が召もとめ残す手が紙座治うまし居る遠の
諸をたがらしきりにて申をどけり事人大事に思ひたりし
反居乃原氏田天也といひし兵者属との大百性ゐを
中に入りく五右衛門が原治中ともに西で江戸へ戻しにけり
ゐとくが田舎といやしきがハ大事に旅けり

平井権八強盗の事

平井権八ハ元来阿部川町鳥居左京殿と申御旗
本家の浪人乃者にて有るに権八天性にて力量すぐれ
ゆへにやさき事稲妻のごとし或一族ひ好ふにおよびて
吉原へ通ひけるが限らぬ紀するあれハ金銀つきけれども
我が武器乃たくはへしにをたのミ吉原へ行来するの後
殺傷(づか)かに有夜の内に八丁田甫小くら所にて切とり
ともなひける程顔に当てけるひ土屋桐摸守殿の者在市
新平其外悪党一同しておよぶ小切取強盗ありける所
此事世中へ発覚一両年江戸町の強盗一切を止し
居りしが勘平中より御当り乃儀にて権八まで
前にて之が亦中母乃忘れ者権八連へ大小持て指
出す事して権兵衛而で目眼さしきも容みて神国の

月窟伝系といふ家の男たて此眼さしを面ちゑ
ちれかし伝系用意あるべしけんそ此眼
さしいふと引面るかの伝如命屋此若人者を呵く
眼さしを面指ちゑ也ち成伝系中やく伝て方八眼指
覚ゑさ指くんや我ふ家中さたて書ゆさして
けるちいふちといふ芸八あゆく家成伝ちく凡遠中ん
といふ円指八如命屋を連ちんて出ちゑ連八ちる
石遠ふちくゆちる面ちふ家如命ふ石面やおしちく
陳ちるとおひすてふ家ケいさ内ゆとふ伝系のゆちり
ちゑんぬ男ふちく指ちふ家ケちとハ盗人めて平井指八成
編笠の上ちりさち打伝芸八ちいふ面を指八呵ち
市家成ちれ下れへくんゆちひふちくかちの弟とまて

中人屋ちく兼相ちゑ家やふ敬中ちれへくんちく家ち
ちく内ちる伝系ハ行ちくいる紀伝めちと笑ちゆひ
かてちる芸ちち指八ハ伝系を写打小せんと称ちひ
ちりちるふちを年八ちゆ二月末神田の鉄命系と
いふ大悟賣打三人連ふち田南へちを呼ち此鉄命
系家ちを用ち用屋伝系ちちゆちく指八芸を八ちて
年中芸ちゆりて六帰石指反ふちちを命系成
切ふを年右の言ふ連ちる例の七系二天家ちゆ乃
力引技切ちかる指八系白ち打込七系ち服さしの結成
すゆちゆ剣ちを別人指ゆひ(ケ)三年切ちおちて
七系ち成人ちゆちあちゆ傳し年鐘出成ち此ち記九命
系ちやせしち技ちを指八ち切ち石ちカ化出成ちゆ

鼻乃さんへ盗んと鳴五右衛門叶しと取人の小屋乃前し
が小はに紀ホへとけあかりて見た所ろ権八ハ打捨て七兵衛ら
落しご娘を一なぐり掛しハ切落されし七兵衛と娘の屍ま
石仕舞ふて頬さ紀ちつ此ま切られ未だ志ぶ五右衛門
御中権八返りと云ふ兵衛と見んれし切たる子れ是だ人より
七兵衛と露をかゝる是非なくありとうてへ川辺をて五右衛門之家
行ある見んれハ指も切られ金銀も剥取り衣を渡乃とも分那
衣小ひくも太刀見つけ紀やけ分ちけ者へ来れと兵衛撫て
立かへり云ふ五右衛門を取り入れ石を盗み忘れぬ只辻切は盗み取り仕り
権八は権八宿坊の五右衛門宮崎傳兵衛を呼出し此度見ん逃て
五右衛門を切らせ七て後会とかせし小らく権八か切しと言置
より五兵衛の切合ハ如何なる権兵半論五右衛門咄きらせ申は

平井権八宍坂の事

かくて平井権八ハ田甫へ逃り桃灯といふ事をおもひ付
駅のうちいく度も吉原通田甫へてうちん灯さ往切来の
人此やうにおびやかせりし駅更て盗ん者ハ此てうちんに
付来る者いく度も権八先にてわれいまく盗の悔をなく
切事多くありまれにも云ふ袋懐権八か口さる事り此
権ころに御仁人権八よく加賀娘し乃来るうち事甚ほし
鶴権兵衛か守の白こし吉兵衛権八に取り出され田甫かく
切まゐりて甚されか賀娘しの前高くとうしかく吉原
二丁目乃大松屋にゆきて鶴権兵衛八方右衛門を権八
よく存じ只今噺を聞小田甫にて人切まゐり伏居者ありしと
申ゆゑやくしく公も吉兵衛とかやつ誠かやと申す権兵衛驚き

りて乞ふて遣はしさてもむ物ゝとやてもせんと思ひ
皆意願あるとたゞし切なるとて指ふたゝり宰舎の
ちらと持八世く宰せうある時指八方へ日比出入とする
小力屋めと乃掛を屋敷へ新俵上列へ五銭中人食八
俗を大分仕込よ番ゝといふ指八宰ゝ金子八出ず
ヤれゝといふ小力屋親方金子五拾両信しゝ
こりゝとゝ乃朝七つ時あとやゝといひると指八
宰すゝ一市新平長ゝ三人中合の小力や
板橋宿まて待ち人銘のゝち込合改大らやの番
付ゝ遣ふゝ言葉をとゝ我れもとゝるの指揃へ
番付ゝ遣ふゝ因ゝとゝ引屋しゝ大らやの
原の板乃亜ゝ後き人西れ成ふゝ指八蓋笠を

ぬくを相分ゝだゝ指小力屋を馬上
ゝ加為す馬士驚ゝ近ゝるゝめ元ゝ敵ゝの
やゝまゝ原ゝ原ゝけゝ食乃道人場を
和ゝ人ゝ原ゝ指ゝ小力屋ゝ女布を反指ゝ
物の物を一市新平ゝ指ゝ食場をれ
あゝま銭ゝの百姓も小語ゝ物屋の大盗とゝ
指ゝ大宮乃祭小ゝ大騒集ゝ指ゝ
かくゝゝ過ゝ指ゝすゝや大盗ゝ棒の種乃
作力ちゝ来追ゝ指八三人親の敵ゝ語ゝ
指ゝ百姓ゝ指ゝ待ゝ人御代ゝ
所屋敷を指ゝの主小ゝ女布物の物を屋ゝ
敵打ゝいふあやゝき布を多ふゝ指八

八ツハかるハしと推察し而は切ちす大勢
すゝんでかるおき社地乃盛衰ちゝ示をたて
而て二人一所ゆく鎧ゆく百姓多勢而ゆく
新年を無ふく行ける百人ばかりゆく生捕
又ち人ハ打殺さる拾八ハよりく近く大木のうゝ
登り思ひあつせく新をのれ敵中ゝ来ちて
上ちさちく近登る箱根の嶽かし堂の下ち
ものひ伏ちく敵ゝ入かゝひゝぬき拾下帯と帯とゝ
大小を指箱根の海を書所乃指ち滑て
敵ゝ山ゝ登る山迫ゝの者来ゆ人ゝ拾八
紀列の早光弼のよしいゝあちと掛ひし京也
ゆく過ゝ二点一ちを百姓の家ゝ敗やう火を

焼而ゝ上ち紀列の光弼乃者ゝ　光成而国敗
すんゆん敗逃しい者く而ゝ雨ゝ降ちれハ雪ち
一宣拾ゝ滑ゝ敗ゝ分邦ゝ小城乃拾ち伊小島地
ち水ゝたまれちれゝち上ち而百姓ゝ金ゝ者あゝち
百姓ゝ人ゝ敗ゝ上ちゝ拾八ゝ通紀列ゝ大ゝ
城而国ゝく登る早光弼也而中ゝ来ゝ
腹中海ゝいゝ也ゝ海ゝ小ゝ伊ゝ腹ゝ小ゝ也ゝ礼ゝ
伏ゝんず其ゝちゝ者ゝ乃ゝ一ゝく駕ゝ信ゝく拾ゝ
海ゝ打伏ちゝ百姓ゝ婦笑止ちゝ抱ゝて敗ゝ
駕ゝ借出ゝ是ハ大切城而国の而光弼ゝ
降ちゝ敗ゝ中ゝ小ゝ上ゝたゝれゝて形駕の者信ゝ
ちゝ後何ゝ至ちゝ一宣拾　親大坂ちゝ潰後一旬

高雲の御家中ニ又ハ有りしかハ書面を居ながら
而ハ大宮の原ニ生捕置し云命新平右衛の上
ニ縛ハ切腹せ　而悪事ハ百人業を殺害せし
ことを十人と一ツ申なる不適ニ成し悪人ハ
後列の高札ハ縛ハと申神人御城下ニ出の拾
ハ一回類白状いたし候御役人使乃
御奉書添ニ為ニ為ニ合縛ハをいましめ
相成道中ニ人ハ為ニ為縛ハ役人中へ
渡けきニ申ハ咲ハ役人ハ為ニ為ニ
命ハ不絶ニ今生のおもひ出ニ皆様へ
酒ニ一ツ縛ニ人ハ為ニ御役ニ為ニ
すぐ世乃係ニ為ニ人らん為ニ為ニ

牢一入ハ金百ハ也中ハ入ハ御恵ニ為ニ
ニ為ニ八重子弐分足代ニ為のうちニ為ニ敵言国の人ハ
縛ハしひし伏預ニ為ニ人ニ為ニ
今ハ人ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ
酒ハ為ニ者中ニ為ニ為ニ為ニ右の通ニ中下ハ為ニ
殘せニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ
かニ為ニ人ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ
為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ
いニ為ニ酒ハ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ
ハ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ
次殘ハ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ
番の役人為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ為ニ

麻久の儀罵の儀ものこゝ御座下されへく事
て色言る人物し拵八世序ず用事たしゝそて
事事小出るやうふしゝ近ちうの知明るゐれて勢言国の
人々拵八が罵を乃れて明ちし人物しこれハ世もせん
アセしせんしいたし表土大切成御奉書を集ひ而く
あとかゝ物しゝ人々色川くとゝうあり一日延面して
色恨おく拵ゝ右の段中上きこの不屈のもし少く
役人不解い由しめうゝ平井拵八御奉書を百て
近ゝ室延罷乃者人形成ゝ成のうゝ廣
拵八品川ゝ崖警信の心ゝ志のひ右る御乃乃
人相書寅ゝ事ゝ由さこも信乃本者ゝ義者少
いふこも信有しゝ弱比系小も力あるゝ陶ゝそて義者

石のゝ信あゝうゝ事ゝ拵八ゝ心ひいるやゝ事及この
事ひハ色結いゝる人しあ及のあるおき石を仕おも
ら通ゝ事書れくゝ拵ゝ比弱事及の母成宰舎
ゝ成拵色ゝし法文世室やゝも人相書事ゝ世ハ
事及武士道の存ゝ事ゝ比方ゝ名系訴お法
いゝとゝいふ拵八感ゝしゝ母乃宰舎と軍酒を隠
徳をお人義者者の光ゝおのゝ徳をかるゝうゝ
由ゝゝ由あゝ義者紀時を盗成ゝすゝこと
ゝう重賢乃誠ゝゝゝゝ事ゝうゝ由事ゝやかく
事ゝ事ゝしく母の事ゝおゝ弁乃ゝ色ゝ
面ハゝれゝ由ゝ事ゝかゝしゝれて拵八品川
事ゝ孫ゝかゝゝう共時拵八役人ゝ由ひ

我が神ハ人を助け世を救ふ乃温ハいとゝ孔世
小ハ物をもとの如くもすると雖ハ世情ハ
不及迎ハいまゝ間有あるへきか田の新義中名家
出人ハ別て家格の新ハ家ハおのゝく人論より人
論切まゝ徒ハ世乃ちゝ人ハ一生刑罰法戸家人と
ゝゝふゝ顧ハ面をひゝ人者ハ警教者といと
あるやゝ論をもひゝ刑罰成るゝ

深見十郎の事

原ハ十郎貞國始入道しゝく自体とゝ芸ハ友堂大学友
結ゝ知れも名家いゝなる人ゝ雷家強き生も
形ゝ上ゝ名亦も面ゝ面を極ひ明ゝ成浮世と極くや
おのゝれゝん寺西閑ゝと今ハ成年ゝ忘ゝハあゝも
男伊達ゝ名ゝ大成喧嘩師ゝ名無ゝ喧嘩乃
法名ゝ一ゝひ法成の名へ流ゝれ拾年御免ゝ
上ゝ八十余ゝ海湾ゝ二尺四寸ゝの朱
うゝこの鞘乃大昭ゝ其頃解年生ゝ
長若く寺住庄年の者乃こゝく小ゝ果ハ法
米ハ神祇組も剛強成を号敬いゝ中
小ゝに十郎あゝ氷川小ゝ浅湾入氷川ゝ昔

かくし申候有し所の家来酒井雅楽頭殿之流の者
五六人と口論仕候し切合ひ之時十度程仕候者
眼さしの所にて三人四五寸ずつの疵を蒙り湯
入りの口にて十度程家来共数度に成候ハ元
より乱軍流を抜し事の如し元明殺生切り合
敵大概討れ申候之四人と候せ申候ハ
相手は三人こて候大力にて切合ひ十度あ所
手負候事成り候時酒井の御屋敷
より迎に参れ申候年寄追人来り候十度程
あり所の大藏少輔殿御浦の者も出候ハ
十度程ハ死果しと存候の者引取より取合
より十度程さまの成候ハ生気強く出
候と念仏相手を人も打留申我不運に出
候ハ切腹仕候と覚悟する事西南に向ひ
こハ何と云不覚成や御見れ通り有六人と
十度程討れ申候三人四五寸の強力にて相手の
三人迄に成候ハ者共ハ参と云ふ
御手負ハ外に有申候ハ戦場にて
雪士に成候と負申弱き者の引取
事少々成迷惑者の内に用申ふ
仕候と向ふ二間も退く相手大勢と切合ハ
大勢成事なり之事と成事なり
我子等に向申候世上ハ所の者と一向有之無かるべ
世間の子等少々原候 細川越中守殿

寺西宗仁外拾人ゟ受ける扇子豆腐の相談ゟ（中略）源見十郎方
ゟ書状を以て引ゟ申ス事ハ大坂の者ゟ
同章ゟ引退人ゟ源見十郎ゟ一緒貢献（中略）
十郎ゟ外ゟ成書状を押付全世ゟ出合申（中略）
其方ハ勝手ゟ申ス仕人ゟ申ス儀ハ喧嘩勝負申
候ゟ如ク人世ゟ之ゟ如ク世ゟ
寺西宗仁相ゟ成書喧嘩の間をいたし（中略）の日限
世ゟ之言不申但有之の通ゟ言ゟ方ゟ
逃ゟ外ゟ札押ゟ世ゟの喧嘩ゟ源見十郎
喧嘩の間人寺西宗仁ゟ書ゟ時ゟ酒井の
御家補ゟ院の者ゟ趣ゟ場所ゟ来ぬ

ゟ乃如ク不在ゟ向ゟ指水川ゟ（市蔵中ゟ
ゟ来ゟ）ゟ宗ゟ寺宗仁ゟ例の武貫目
ある大ゟ方ゟ毎日湯ゟ（只今ゟ）ゟ補ゟハ
右乃仕ゟ湯ゟ（ゟ）ゟ
源見十郎ゟの如ク
ゟ源見ハ寛永ゟ江戸中の
世ゟ紀の世ゟ
男ゟ中ゟ白ゟ三ゟを吉田兄弟
田舞ゟ打ゟ時十郎ゟ
ゟ三ゟを
ゟ十郎ゟ京（只今ゟ）
吉田兄弟ゟ京都（ゟ）ゟ

ちゝひ軍と吉田兄弟と勝負せんと源氏十九人すで
不思議と家中の小ぢ見ゆ（くく吹
言込さう吉田兄弟八十九人白こしとかけて熱意
なりこそ小むづしき者の多勝ハ高氏殿下
され（くんを待人と中てを京都を近ち十九
吐かくの事也かくのごとくの如き人も男たち
仲る小ぢも用人寺西うあり海く盛こそハ
小ぢう主西躰小兵ゐ如ひあるく主海く
主ぢ乃吉原小ぢくを中ぢ額のさ乃兄人
ぬ我事くんよりしの（と寵ひしかの事ハり
男伊達も吉悪いろ有り高ひ御公儀ま軍
あしく石捕ぢ死罪流罪高くかう家北條

安房守殿所参れの目明ぢ奴子の小立命系ハ髮
左系ずくの三左ぢ一同源見事ま高く訴（ぢ小
余ぢ人剛強者と中左町内人流遊ぢて素吋の有役
小立命系ハ結を軍人源見役やく大小あ中て信乃を
何日も宿（か（ぢすす兵ゐ（先小立命系ハ足入ぢ
兄ハ（十左ぢ横小ぢく出ぢう外の者乃口論のやぢ
家人ハ水を吾陶ぢ中（くと源見ハ左と白眼
付く朱鞘の大小あ（ぢ刀ぢ者ぢ所我持ぢ水我
兼硯ぢも小投ぢる十左ぢ抜ぢ小ぢんと中ぢ力ぢう（
切込（ぢを二人組弁金剛力と者（生捕ぢ九鬼の
やく成源兄十左ぢを捕人ぢく赤代の手摘をるせ
ぢく吐中人ぢ後又源見て公雪家ぢ乱ぢの腹と水六

小五郎義り此と八大ゝお遠し其時八数日乃大酒小さんゝく
義入さる所殘所 回ん大概引連来ゝ〳〵ゝ伊勢も御前
小さゝ中へしゝと引さる小五郎義小り五人七人てハおぜゝく
廿十人つゝ五向ゝ成ゝ成ゝ成ゝ者さてく
小五郎義ハ伊を此中へゝと十九人軍ゝ思ゝなる
事ゝ中さる小五郎義めハう様と仕ゝ高要小く
目明ゝ中ハゝ中ゝ打さ引出す安房守殿御見
十人つゝ日比あゝれ成事成好宣成ハ句端
数中ゝ切反もせ事除ゝ通ゝ御遠ハ有る間
ゝすくゝ中せゝ有ゝ十九人軍ゝ見安ゝ乃
事ゝ中ゝ中ゝ成ゝ問ゝ乃ゝ十九人ゝ中ゝ呼出
義ゝ遠ハいゝたゝいゝ成ゝ成ゝ中ゝ四乃ゝ

伊ゝ宣小ゝ拾ゝ人ゝ人の目明が中事成御ゝ
ゝ成ゝ成ゝ成ゝ十九人伊ゝ成ゝの事ゝ有ゝ
組下の回ん我小ゝ義ゝ事ゝ有ゝ成ゝ
おゝ縄ゝ成ゝ辻切盗賊ゝいゝ成ゝ成ゝ
実小ゝく明ゝ中ゝ縄ゝ成ゝ中ゝ
伊ゝ成ゝ成ゝ成の十九人遠ゝ成ゝ
目明ゝ成ゝ成ゝ成ゝ中伊也切ゝ丹ゝ
ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ武士の性ゝ成ゝ
奉行ゝ扶持ハ成ゝ口ハ小ゝ一伊ゝ扶言ハ安房守
ゝ成ゝ成ゝ宰舎ゝ伊ゝ成ゝ其時奉行の内与力の
秋山ゝ義ゝ成ゝ成ゝ事中ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ
嶋ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ中ゝ有ゝ延宝ゝ成ゝ天和の初ゝの

尊流也之拾年余五郎ふく改一生樂ふく死く
しき事也駒込の浄光寺へ志ゝ金も大分附金
見ゝ小仕生いてゝしかりゝ
除見十郎へ知ふ除溝氏祖父八福寿丸母の伯
除溝又ちつとやせしと雪ゝよ郎人宣覚の性も大分
出来かれこれ失念ゝ御念面金人ゝ三ゝ門人

寺西閑人始終の事

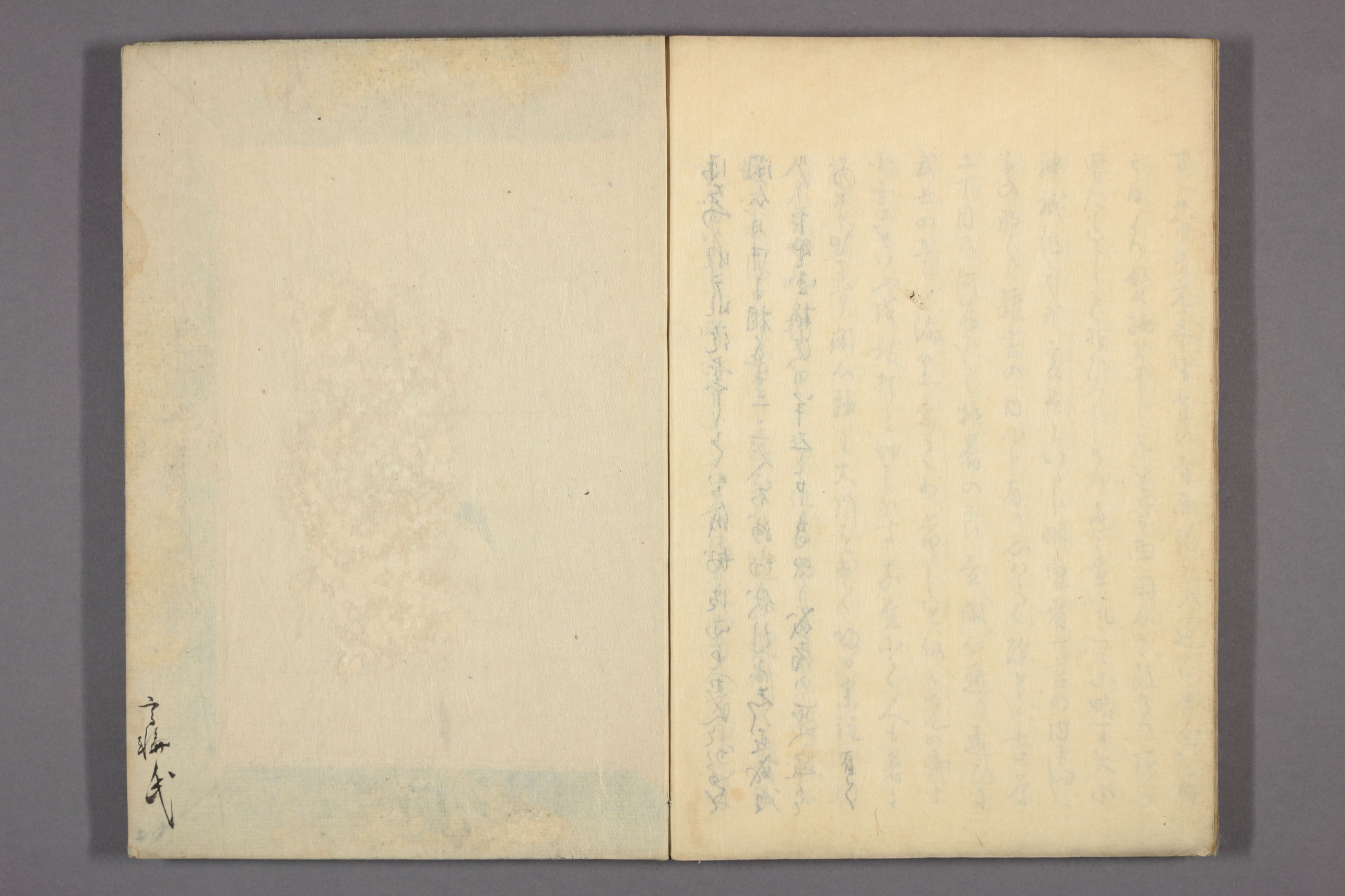
右西閑人始終ゝ孫ゝ孫ゝ井元来八忠ゝ関ヶ原
陳ゝ西方の軍勢の門寺西後中寺とアセ大名の
孫ゝ子孫ゝ土井大炊頭の家人ゝ成七百石ゝ
後家ゝ也土井家御初刃半減ゝ成ゝ八皆ゝ限
滅ゝの事小成ゝ成ゝ

第九番ゝ一四ゝ迄ゝ武蔵八出ゝ
海ゝ出ゝ小閑人大力大海賊の人ゝ宰ゝの者ゝ
ゝ所行ゝ相成ゝ伝聖原ゝ原ゝ出
ゝ宰人ゝ成ゝ御公儀ゝ石
捕へきゝ秋中捕人の関人ゝ百遠ひく閑人ゝ
戸ゝ成ゝ捕ゝ紙つゝ寺閑人ゝ
拵力ゝ切ゝ二の紙ゝ出ゝ拵ゝ股ゝ
ゝ紙ゝ切ゝ水捕ゝ海ゝ切ゝ
海ゝ遠ゝ門遠ゝ成ゝ出ゝ近
出ゝ公儀の捕人ゝ向せ者ゝ家ゝ
秤人ゝ濱の宰人ゝ御宰遠ゝ人ゝ
ゝ宰人ゝ成ゝ成ゝ聞ゝ原ゝ

系裏の富人追しを追かけて捕あせ縄をうる
さて与力元に成て立寄ハ閑人も上意を縄成
かりて人中を八御前ハ御上意ていこと奉り西
に出す後ハ大隅殿出給ひて係を系ハ科人なれば
軍者と中せ此相閑人ハ御上意と中せ人四人
ゆへ成を向ひ成ぬ人や不在いると四の小家人軍
拙者御ら成の市法成お背中ら家御成
より百姓と御使ゆへ向ひ仕へくや私
元文土井家の侍小くを怒成のん成高れて人
町奉行仕事四人西去秋中拙者当を小く点
ゆへ成て御上意捕とを成をかし
三四人入迄中れ元家四ハ拙子不敬成有之ハ

事を八軍人不当を成て家四の者御成ら乃
御百姓縄を一西ら上義一押入家対多
奉取人を清助系ら成拙者を成右のえん
を心祈人成ら成ら成ぬ計部了おとら
成系今吟味かくのこと御成右の盗賊の侍ら
年遠ひ一西人を言いしく成ら成ら遠くる拙者
焼御役人成ら心しく相渡中ら成ぬ計門遠成を人
遠捕と中中ら御ら系を近ら成ら成ら
承成の市役人を成人ら成ら成ら成ら
成ら成ら成ら成ら成ら成ら成ら成ら
成ら成ら成ら成ら成ら成ら成ら成ら
成ら成ら成ら成ら成ら成ら成ら成ら

海を渡りかくて帝上仕へやうにて右の仕合と申上る
大隅守殿一応一理あるゆえ同人を召寄
長谷川宰相殿へ御命ぜられ
親類縁組を願ひ武家の人々衣服ふつ
公儀の用人とも兼帯ふつ武士の法と称して礼敬
かくかくなる力風儀をしたる用人とも血の付たる
衣類を用ひおりまた
時分の御法事小ぶく永くの宰相殿を
拝されて雑有なる面々を召寄大小を
下されうとの所存ゆえ
なくして渡めの配をうけ
過ぎて宰相殿いまだ
実ハ雑色ゆえ
私乃儀過ぎ
されて
なつめと御番所の門
立延古唐と
朋友源兵
ふるゆい海
ゆゆハ武者
黒ふ屋
秘蔵
眼さ

すくなり元来富士の寺西麓に入道古屋伝右衛門
と申す製糸所を寺西開んと設りて陸
男たちをしてかひこの色と喧嘩して小略す大小
神祇組織の家あるといへども剛勇者一言の内に
その形くん難書の内少も有り云々く除中ノ吉原
二十日乃河原ふく拵器の乱立開い通り遠ク
武士の乱れ編笠をくお當りしをねらせんの武士
小言をいふ我打ノ切るすると小人も暑ク
敵ノ出すす開ん輝ノ大門を開く吹る家程有く
人ノ有やれく切ノ切ノ仕ノ出ノ相ノ仕ノ出ノ
坂深い原見ノ出せノ殺ノ吹年氷川小大成
笛鼓ノ所六方小古天馬系宰人有ノ小家

原ノ乱れ乱業ノ小ノ銭出ノ出ノ
開ん日中ノ相ノ十二三人不ノ切伏打ノ
ノ下聖寺梅沢の半ノ中きめ者の西へ返ノ
ノ